

尾形亀之助読書会通信

第四号



「北日本詩人」大正15年4月号の表紙絵・尾形亀之助

はじめに

もう新しい年を迎え三月になってしまいました。昨年末にはこの尾形亀之助読書会通信第四号の編集作業を急いでおりましたが、ついに年末には出すことができず、ふがいない気持ちでございました。そうこうしているうちに、皆様のお力添えをいただき、読書会の開催も七回目を無事に終えさせていただきました。そういう訳で、ご無沙汰しておりましたが、尾形亀之助読書会通信第四号をお届けします。今号は、昨年十二月十六日(日)に、秋に開催した第五回尾形亀之助読書会「亀どの句会」の番外編として開催された繁昌院句会(勝手に小熊が命名)の句を中心とした内容をお届けします。この繁昌院句会は、第五回尾形亀之助読書会でゲストとしてお招きした小熊座の渡辺誠一郎氏の「また、ここでやりたいですね」との温かいお言葉をいただき、尾形亀之助の菩提寺である繁昌院との調整は西田さんに御足労を願って開催されたものです。尾形亀之助読書会とは切り離して、今後とも不定期ということで開催してゆきたいと思っております。特にいつ頃に開催するということはありませんが、そこをうちに西田さんの早業で、次回の開催は二〇一三年五月二十六日(日曜日)と決まりました。ご興味のある方は、小熊まで連絡をいただければと思います。五月は奇数月なので、尾形亀之助読書会の「第二回亀どの句会」として開催したいと思っております。今号は、尾形亀之助読書会の一つの会として開催しますが、亀之助の詩とはほとんど関係ない純粋な句会になります。場所が、亀之助の菩提寺

ということ、何かしらの亀之助への供養になればと思っております。句会へ臨む姿勢としては、詩人はあくまで詩人らしく、俳人は俳人らしく、詩的言語で短詩型文学の世界を構築できたらしうと思っております。小熊座の方々が多数(六、七人)参加いただけますのでどうかよろしくお願いたします。

繁昌院俳句会について

(二〇一二年二月一日)

- 冬の観音ころに錨もてといふ 1票(俳1)・詩
- 初恋は雪虫の背なふれること
- 肌に染む古紙の香りに敗戦日
- 死ぬときは吹雪く日がよし馬上にて 3票(俳3)・俳
- 着膨れや踏み処なき「ぼおぶら屋古書店」
- 大寒や等圧線の縮こまり
- 地底まで入日呑み込む冬の山 (詩1)・俳
- 裸木となりて自在や大銀杏 7票(俳5、詩2)・俳
- 換気扇吐き出すものも十二月 2票(俳2)・詩
- 尾形橋渡りて年を惜しみけり (俳4)・俳
- 右腕はコートに忘れ宮沢賢治 1票(俳1)・俳
- 父祖二人峠越へ来て雪の里
- 綿虫の翅よく見える日暮れか 4票(俳3、詩1)・詩
- 銀杏散る父の遠忌の近づけり 1票(俳1)・詩
- 日時計の針に朝の陽冬の蝶 2票(俳2)・俳

- 雪白したバコほろけて寿命のじゆ
- 水平の記憶のままに枯木立つ 4票(詩4)・俳
- 鉛筆の芯くもりや大根炊 3票(俳2、詩1)・俳
- 亀さんやこっちおいでよ雪見酒
- 金輪奈落男を産まぬ雪女
- 雪中に座すと思えば暖かき 1票(詩1)・詩
- 竜の玉海の声ぞも仕舞いけり
- 手を合わせ炎天の先大厄災 1票(俳1)・詩
- 足うらに神のぬくもり夕焼けか 1票(詩1)・詩
- 闇霽れてほのけし今朝の雪景色 1票(詩1)・詩
- セーターや定年過ぎてより親し 4票(俳2、詩2)・詩
- この先をどう生きようか八頭 3票(俳2、詩1)・俳
- 蔵王嶺の風は真つ直ぐ大刈田 1票(詩1)・俳
- 雪子テソ、日ニチテ鳥ソ、石畳 2票(詩1、俳1)・俳
- 藍深く冬の葦に沈みけり
- 慟哭の伽藍この慟哭の 2票(詩1、俳1)・俳
- 冬木立からから飛びし月の音
- すぐろ野は胸の痛みを置くところ 2票(俳2)・詩
- 母眠り山眠るとき神宿る 1票(俳1)・俳
- 夢いまだ夢のままなり冬の蝶 1票(詩1)・俳

隙間風溜まりさみしき盆の3票(俳2、詩1)・俳

風鐸を鳴らすは夫か冬木立 1票(俳1)・俳

ひきだしに日記潜める 2票(俳1、詩1)・詩

ポインセチア抱いて雲衝く男 3票(俳3)・俳

○参加者(順不同)

渡辺誠一郎様(小熊座)、佐藤きみこ様(小熊

座)、波山克彦様(小熊座)、永野シン様(小

熊座)・日下様(小 熊座)、大久保様(小熊座)、

西田朋様、宮崎様、金子忠政様、伊達泳時様、

小熊昭広。作品のみの参加…鈴木努様。伊深久

男様。

※記録が不確かです。参加者の欠落、お名前
の間違いなどありましたら、ご勘弁くださ
い。

句に対する作者の氏名は省略させていただきました。意図はあまりないのですが、記録が不鮮明で、間違いが起こる可能性があること、それに、この会は作品を競うものではなく、自由に気儘に遊ぶということに重きを置く、という二つの意味があるということでしょうか。当日は、当然に、作品に票が入った作者は、名乗り出るわけで、最後に全句の作者が分かるわけですが、それはその時の会だけのこととしたいと思いません。

ただし、俳句を詠んでいる方と詩を書いている方で、作品に入れた票の内訳と作者がどちらかということとを、最後に書き記しました。例外の一作品を除き、特に大きな傾向はないと思います。その例外の一作品は、俳句を書かれている方の作品「水平の記憶のままに枯木立つ」です。当日の参加で詩を書いている者全員である四人がこの句を選んでいます。そして、俳句を書かれている方は、この句を誰一人として選んではいません。そこに、何か違いがあるのかと詮索したくありません。

小熊の勝手な考えで言うと、言葉で捉えようとする対象に枠がない、という点で詩人達の心に響いたのだと考えます。俳句も詩も、この自分たちが生きている世界を、言葉を使ってなんとか捕まえようと、獲物を網ですくうように、言葉を操り、創造行為を行うわけですが、俳諧の世界は、前提に額縁のようなものがあるように思えます。つまり、魚を釣るのに様々な漁法を使える技術と仕掛けを持っているということと、それらを駆使して、時には素手で掴むということもあるでしょう。どういう漁法でも、その時々の手順というものがあるように感じます。この手順が額縁と言っても良いものかと考えます。それだから様々な態度で言葉を使って遊べる、戦える、抵抗できると思えます。それらからはみ出すことも、また枠があつてのことです。このことは、とても大事な創造力の源になることだと思えます。

一方、現代詩は、極端な話、いつさいの枠はありません。自分で枠を創ることはできるのですが、それは枠がないという前提の下に行うものです。ですから、魚を捕まえようとはするのですが、その術がわからないうまま行っているということになります。枠がないということも、創造行為の源になることだと思えます。つまり、自分という存在を感じ取ることで、魚との関係を知ろうとするとところから始まります。視線は、対象に向かつてはいるのですが、どうしても自分から離れられないままに時間が過ぎてゆきます。なので、詩人はいつそう孤立感が深まるばかりなのだと思います。俳人と詩人、どちらがよいとかどうとかいう問題ではありません。

それで「水平の記憶のままに枯木立つ」です。これから先はさらに勝手な推測です。作者である俳人は、枠の中にきちっと収まる情景を詠んだものと思えます。しかし、それが何を意味するものか、何を象徴するものか、今ひとつ納得できません。ここには、俳句の中の美意識、つまり「俳諧」と言えるものが希薄です。枠がないと言ってしまうえば、簡単なことではあるのですが。

で、小熊の勝手な解釈は、「水平」と「立つ」とは、水平と垂直がクロスする情景です。光と影と言っても

良いかもしれません。生と死でもあります。そして、クロスとは、十字架です。キリスト教的なもの考へ方で言えば、「水平」とは平和(愛)です。そして、「垂直」は神なのです。さらに「記憶」とは、流れている時間です。「枯れ木」とは生命感を失った存在、つまり過去又は死です。そこから連想されるものは、十字架に縛り付けられて処刑されたキリストの姿です。これは全くの勝手な解釈なのですが、イエスキリストの受難を想像させるものがあります。キリストの受難は、記憶として語り継がれてきました。この句は、何気ない自然の風景の中に神聖なるものを見た、そしてそれは己自身の中の神聖なるものである、というふうには詩人は全く自由に、というか自己勝手に言葉を読み解きます。そして、その次に、言葉が改行を伴い生まれ生きてゆきます。その「神聖」な思いを、次の言葉につないでゆきたくなるのです。そこは「詩の一行目は神が書く」とよく言われるようなことのように通じると思えます。詩人のあこがれと言えればそれまでですが、強烈な吸引力を持っていきます。これは、この句を選んだそれぞれの方で解釈というか、感じたことは全く違うのだと思います。長い文章になりましたので、これくらいにして次回を楽しみにしましょう。

第六回尾形亀之助読書会について

第六回尾形亀之助読書会は。十一月十七日(土)に大河原町の駅前コミュニティセンター「多目的ホール2」で、詩人の佐々木洋一氏をお招きしまして開催いたしました。亀之助の詩の世界に対し、けっして寄り添わない、けっして追隨しない見事な話でした。自らを貧乏人の家系とし、一歩引き下がりの上で、したたかに裕福だった亀之助の出自を見下す辺りは、年少の頃から詩を書いていた、百戦錬磨の詩の達人佐々木洋一の真骨頂でした。印象に残った言葉としては、「詩を作るということは、ぼんやりとした時間を過ごすこと」というものでした。働かず、明日の飲み食いへの不安を持たず、仕送りだけで生活した裕福

な家のお坊ちゃまであった亀之助には、ほんやりとした時間が、ありあまるほどあったに違いありません。ここには詩的才能とは、まったくかけ離れた詩の生まれる要素が歴然としてあったということでしょうか。亀之助の詩の魅力は評価しつつも、詩以前の人間が生きているということ（意味）における問題として、相容れないものが佐々木氏にはあったのだなあとと思わずにはいられませんでした。

自分の出自に拘ることとは、そのまま今の自分に拘ることで、徹底的に自分の核となるものを追い詰めることで生まれてくる言葉があるとすれば、亀之助の言葉は最後まで自己同一性を達成できなかつたというか、それを獲得することをあきらめた人間の吐いた、他人にとってはどうでも良い、ため息といったところでしょうか。佐々木洋一氏は、本当はそのような詩人を許せなかつたのだと思いますが、そこまでの過激な話にはなりませんでした。そして、楽しく打ち上げの時間を過ごさせていただきました。佐々木洋一さん、それに読書会に参加していただいた方々、本当にありがとうございました。

とにもかくにも、約一時間三〇分のお話を、丁寧に原稿にまとめて、内容を整理してお話しくださった佐々木氏に改めて深く感謝申し上げます。

第七回尾形亀之助読書会について

第七回尾形亀之助読書会は、二〇一三年一月九日(土)の午後三時から大河原町の駅前コミュニティセンター「多目的ホール2」仙台在住のイラストレーター、村上かつみ氏にゲストとしてお越しいただぎ、開催させていただきました。参加者は、村上氏の奥様を含め、一二名の数となりました。本当に皆様ありがとうございました。村上氏の亀之助の生き様に距離をとって、客観的に亀之助の詩のみで、イメージをふくらませイラスト

トを描くという行為の果てに現れたイラストはとも陽気であつたり、懐かしくあつたり、寂しくあつたりするのですが、何十枚と創られてイラスト集に収められた作品、一つ残らず全てについて、村上氏の制作時の思いを語っていただきました。時間が無いところで、あれだけ多くのイラストについて、亀之助の詩と絡めてお話ししていただけたことは、とても楽しい時間を共有できて、企画した本人としては、どう言葉でその嬉しさを表して良いのか分からないほどの喜びでした。

劇作家別役実とのつながりで亀之助の詩に興味を持った村上氏ですが、村上氏が別役実の童話にイラストを描いたということからも、どこか童話の世界に通じるものがあります。尾形亀之助は、北川冬彦に自分の詩を「童心」と表現されて、怒り心頭に於いて、その反論を興奮気味に書いていますが、敢えて小熊の考えを書かせていただければ、童心と幼稚とは全く違うことで、童心には「冷たさ」もあるのだと思います。なので、北川冬彦の感性は、亀之助の詩を切り捨てることではなく、むしろ亀之助を怒らせるほどのエネルギーを持つていたという事実として、評価すべきことと理解することが妥当なのだと思います。悲しいことは、それに対して亀之助はただ怒るだけで、そのことをバネにして「生きる」という方向に向かわなかつたということでしょうか。

ちよつと脱線しましたが、村上氏は、亀之助の詩に対して、「深刻なことを書いている」と言いながら、亀之助の詩から受けたインスピレーションによって描かれたイラストは、とても賑やかです。そこには、不安も、焦燥も、衰退も感じさせません。その村上氏が描いた明るさとは、何なのでしょうか。文学側の人々は、「虚無の詩人」と亀之助のことを表現します。しかし、色や形などの視覚からの刺激を研ぎ澄ませた画家である村上氏は、イラストの中にいっぱい的人物をデフォルメしながら描いています。亀之助の詩をデフォルメしていると言うよりは、亀之助の詩から得たインスピレーションをデフォルメしています。つ

まり、亀之助の詩の解釈のごときは一切抜きにして、純粋な亀之助の詩から得た魅力を、画家の興味で描いているのです。そこにあるのは、亀之助が詩で生きてゆこうとした時期に書かれた文章のなかにある「ユーモア」という言葉が蘇ってくるものではないかと思えます。極論ですが、亀之助と村上氏は、この「ユーモア」というセンスで見事に繋がっているのだと思つた次第です。

あとがき

次回三月一特日(土)は、午後三時から大河原駅前コミュニティセンター「多目的ホール2」で詩人金子忠正氏をお迎えして、「亀之助の詩と政治性」というテーマでお話を聞かせていただきたいと思っております。例によって、いつも参加いただいている方には、直前にインビテーションカードをお送りしますが、それには関わらず、この日この時間に他に御用のない方は是非、是非、予定表に印を付けて出かけてきてくれればと思っております。これまた例によって、読書会終了後に打ち上げを大河原町内の「雑の樹」(0224-523923)という和食料理屋で行いたいと思っております。皆様、お待ちしております。

また、最初にも書きましたが、五月二十六日(日)の第九回尾形亀之助読書会は、午後一時三〇分から繁昌院本堂にて「第二回亀どの句会」として、純然たる句会を行います。当日の句会のやり方は、近くなつてからお知らせいたします。いずれにせよ、作品(俳句)を五作ほど持ってきていただき、集まった方々で座を持つということになるかと思えます。どうか、そちらもよろしくお願ひします。

【連絡先】

宮城県大河原町大谷字原前五十の五 小熊昭広
kaisei@poetic.jp TEL: 090-5230-2349